

再論中国近代史に於ける西郷隆盛像

——日本の明治維新は中国革命の第一歩です。中国革命は明治維新の第二歩です。

中国革命と明治維新は同じ意義をもつものです。(一九二四年二月二四日 孫文) ——

中村 義

はじめに

司馬遼太郎さんから、次のような、おハガキを頂戴した。文は短いが、内容は中国歴史認識にかかわり、興味深い。

昭和五八年(一九八三年)四月四日の日付である。

お手紙お返事おくれました。ずいぶんさがしてみたのですが、出典みつかりません。西郷関係の雑書のたぐいです。左宗棠が日本人に対し、「貴国は惜しき人物を殺した」と明治一〇年代にいったのです。その日本人というのは正規の外交官でなく、シナ浪人のハシリのような人物だったかと思います。出典を提示できないのがざんねんです。左宗棠については新中国

はまだ評価しません。太平天国を正義とした以上その鎮圧者を不義とせざるをえないためです。不自由なことです。しかし個人レベルでは、内々評価している人が多いようです。「左公車」(水車型の低水クミアゲ装置)などでは、大いに礼讃しているのです。

これは司馬さんが陳舜臣氏との対談で「左宗棠は將軍でありながらめずらしく国際感覚もあったんですが、ナショナリズムで立ち上がって、武にあらずしてはどうしようもないと義勇軍を組織した大将の一人ですけどね、大変な人物のようですね。西郷が死んだときに、たまたま中国に来ていた日本人に会ったとき、日本という国はしょうがない国だ、西郷のような人を殺した。こんなことをして

はダメじゃないかと言った」と発言している⁽¹⁾。西郷隆盛の魅力はたんに日本人をとらえただけでなく、中国人の心をもひきつけていたと言うのであった。同様な事を萩原延寿氏との対話でも力説している。

私は前から中国に於ける西郷隆盛論を考えて資料集収をしていたので、早速左宗棠（一八二一—一八八五）の文集である『左文襄公全集』をあたってみたが、西郷隆盛に関するものは見つからない。中国のこの種の書物で全集といっても「不全」なものが多いし、また談話の類いだとすれば、掲載されてないであろう。そこで司馬さんに出典は何かを尋ねた。その返事である。

「ずいぶんさがしてみた」、「さんねんです」と書いてある。司馬さんの亡くなった後、書斎、書庫の様子が写真で紹介されたのをみて、あの膨大な蔵書、資料の中から、捜し出すのは容易なことではない。貴重な時間を費やさせ、申し訳ないことをしたと悔やまれる。確かに左宗棠は湖南出身で太平天国を鎮圧する洋務派の一人であり、その後陝甘総督となり回民起義を鎮圧した。さらに新疆を平定後この地区の経済と文化の発展を促進させ、そのうえロシアに対して、イリで国境を設定して、ロシアの膨張をくいと

めた。こうした点から洋務運動が太平天国鎮圧と半植民地化を深化させたという歴史的評価が強調されていた時でも、曾国藩や李鴻章らと幾分違った洋務派の一人とみなされていたが、ここ数年の洋務運動が近代化と言う視点でみなおされるようになり、左宗棠の積極的側面が一層注目されて来ている。

しかし、問題は左宗棠がどうして西郷隆盛について、惜しい人物と評価するまでの情報を得ていたが知りたいのである。中国人の日本認識にかかわる重要な問題である。司馬遼太郎さんの外に、島貫重節『福島安正と単騎シベリア横断』（上）にも左宗棠は西郷の死を聞いて、「不世出の英雄をこのようにして亡き者にする日本という国は哀れな存在だ」と述べている。しかし、ここでも出典は明らかにされていない⁽²⁾。

ただ闇雲に出典にこだわっているのではない。左宗棠はまさに西郷隆盛と同時代人であり、それ故、もしそうだとすれば西郷隆盛について中国で最初に言及したことになる。したがって出典が明らかでないと、西郷伝説をまた増やすことになるのと思ったからである。

日本の西郷研究は実証的な研究が積みかさねられている

と同時に、福沢諭吉「明治十年丁丑公論」の抵抗精神、内村鑑三「代表的日本人」の武士の模範、そして頭山滿らの大陸先駆者としての尊敬というように、実像と虚像の入り交じった西郷隆盛像も多く、さながら一種の日本近代政治論、文化論である。

田村貞雄氏の「西郷論の系譜」によると、一九四五年敗戦後の西郷隆盛評価は「どちらかといえば、西郷を反動的士族の代表として、また大陸侵略論の先駆者として否定的な評価をくだしたのである」であった。しかしこの一〇年間、毛利敏彦氏による「明治六年の政変」をはじめとして実証的研究が次々と発表され、史料の検討をつうじて、征韓論者として西郷隆盛をとらえることへの疑問が提出された⁽⁴⁾。西郷隆盛の評価は定まっていけないといえる。

田村氏は「西南戦争における西郷が、不平士族団に擁せられたことはだれも否定していないのであるが、在官中の西郷が内心どのような苦悩があったにせよ、徴兵令や秩禄処分など士族解體政策の積極的な推進者であったことについては、たしかである。ところが多くの研究はそれとはまったく違った西郷像をつくりだしてきたのである。すでに社会的に定着していた西郷伝説から、歴史家もまた自由では

なかったのではないだろうか」と述べている。

私は一〇年前、「中国近代史における西郷隆盛像」を発表⁽⁵⁾し、清末から一九三〇年代まで、中国人の日本近代認識を西郷隆盛を対象としてあとづけ、「侠」という意識が中国人の西郷隆盛像形成にの要因となっていたことを考察した。そこでこの機会にその後気付いたことを加えて、再論としたい。

一

中国の西郷隆盛研究、西郷隆盛観は明治維新研究、明治維新観に関連して論じられていることは言うまでもない。明治維新への関心は今なお強く、研究は非常に多い。例えば王曉秋「清末中国形形色色的明治維新観」⁽⁶⁾と『近代中日啓示録』⁽⁷⁾、さらに呂万和『明治維新と中国』⁽⁸⁾等々である。維新変革の指導者に対する関心も高い。例えば吉田松陰、福沢諭吉、伊藤博文、西郷隆盛などについての専論もあり、政治史、思想史、日中交流史、日中比較史など広汎な分野にわたっている。本論文ではそれら研究の紹介をする余裕はない。おおよその研究動向については山口一郎氏⁽⁹⁾や小島晉治氏⁽¹⁰⁾の專著があるので、参照されたい。とりあえず、本論は現在の中国歴史学会の西郷隆盛研究の成果についての

み紹介しておきたい。まず韓文娟の「試論西郷隆盛⁽¹⁾」がある。その要旨はおおよそ次のようである。

西郷隆盛は波乱起伏に富み、矛盾が充満した生涯であった。討幕を指導した第一任者で、尊敬を集めたが、その後西南戦争では唾罵された。西郷隆盛の功過是非は日本近代史の難問である。この難題を解明するため、二つの事実すなわち征韓論と西南戦争が鍵である。西郷隆盛の征韓論は一方では士族の利益を維持せんがため、朝鮮に領土拡大をはかった。それにより国内で衰亡しつつある下級武士層を救済しようとした。その一方では国家と民族の為に、西欧に倣って、資本主義を發展させ、近代国家を構築しようとした。この二つの側面が西郷隆盛の政治思想の二重性を表している。

西南戦争は旧武士団の新政権に対する不満で、反動的傾向であり、歴史を逆転させようとするものであった。西南戦争には少なからず民主主義思想もみられ、無産階級化した士族の明治政府反対であった。自由民権思想の持主もいたが、いずれも西南戦争の指導的思想ではなかった。幕末維新期の日本は資本主義生産方式が確立していないので、成熟したブルジョアとブルジョア思想も成熟し

ていなかった。西郷隆盛の政治思想中には資本主義要素と封建思想の夾雑したものである。西郷隆盛の波乱起伏の生涯は上記の二重性の矛盾衝突であり、新旧の矛盾の中に徘徊し最後は時代の潮流に背いて選択し、倒れたのであった。

もう一つ米慶余「日本西南戦争⁽²⁾」の西郷隆盛論を紹介したい。小冊子であるが、最終の九章「歴史功過 后人評説」で以下のようにいう。

西郷隆盛は本質上、封建士族の典型で、薩摩藩を討幕下級武士に有利な政治体制を全国に拡大しようとした。大久保利通等は封建士族から完全に離脱したわけではないが、しかし日本に立憲制的君主官僚専制国家を建立し、上からの資本主義は發展させようとした。この二つの分岐は一八七一年一月の岩倉欧米視察団の出発から始まる。この二つの路線は互いを全面否定するのではなく、共にすすむ政策でもあったが、しだいに彌補できない矛盾が発生してきた。西郷隆盛は板垣退助に、与論に頼って有司専制に改編する目的を伝えた。西郷隆盛は彼と彼が代表とする頑固士族はすでに日本社会發展を阻止する力とすでになっていたのを意識していなかった。西郷

隆盛が堅持する政治主張と一定範囲内の実行政策はすでに政府の取る各種の政策と衝突していた。しかし西郷隆盛は討幕時期から形成していた自負心と薩摩藩士族特有の優越感とくに一般平民に対する特権意識は、究極には新政府と対抗する途を歩むことになった。鹿児島島の頑固士族にとって西郷隆盛は理想と願望であり、彼らの政治主張の実行を求めて、付託する人物であった。(1) (したがって) 日本社会の発展から言えば、封建頑固派士族反乱の平定は、日本社会に有利なものであった。第二次世界戦争前、黒竜会首領内田良平は西郷隆盛を「万古英雄」と言った。内田は西郷隆盛の功績は日本「国民精神の花、国民精神の実」であるとした。また国民精神の化身とも言った。田中惣五郎は「西郷隆盛」の中で、「西郷隆盛の偉大さは私心の無いことと、愛情に富んでいること」と書き、また「国家のために尽力し、農民を愛し、かつ友人、後輩、父母、妻子のすべてに對して、豊かな愛情を注いだ」という。多少の賛成者はいらうと思うが、西郷隆盛挙兵の目的と動機からいって、西郷隆盛は日本国民性の化身でもなく、すべての人に無私の愛情を注いだと言うことはできない。西郷隆盛は封建士族の利益を代

表しているし、頑固士族の呼び声に応じたのである。西南戦争の拡大するにつれて、農民百姓は次第に西郷隆盛から離れて行った。甚だしくは老人婦人たちは山に逃れた。挙兵に応じたのは唯、少数の下級士族であって、「自由」「民権」を勝ち取るのだというが、実際は士族の権利地位に不平な輩の争いであった。

以上のような西郷隆盛研究はオーソドックスな歴史研究と言える。主たる論点、評価は西郷隆盛は封建士族の典型的指導者ということ、論証過程は日本の研究成果、主として井上清氏や後藤靖氏によっている。(13) 毛利俊彦氏の成果については全く言及していない。多分情報を得ていないのであろう。西郷隆盛をはじめ明治維新の指導者等が、後の膨張政策、中国侵略へと突き進む大陸侵略者のプロトタイプである事を含意しているように思われる。この視点の研究の系譜には当然ながら、一九四五年以前の中国における研究がある。すなわち、一九一五年の二十一カ条要求から始まる中国侵略政策の強行に對して、周知のように、中国から厳しい批判、反対運動が昂揚した。

西郷隆盛についてみると、例えば五・四運動時期の「日本国民に告げる書簡」(14)で次ぎのように言う。

五〇年前に開国と進取を標榜して立ち上がった維新の志士も大陸侵略を根本的政策と考えないものはなかった。大木（喬任）氏の日露同盟による中国瓜分論や西郷（隆盛）氏の征韓によって大陸をうかがう計略はその代表である。だから大陸侵略は日本の伝統的政策であり、一切の対華方針の基礎なのであるだ。

また山口一郎氏が紹介している李凡夫「日本の過去、現在と未来」によると、次のとおりである。

（明治）政府内部の主戦派の西郷隆盛と進歩派の大久保利通の間に尖鋭な対立がおこった。征韓論を中心として、両派の対立が表面化した。頑固な西郷隆盛は征韓でなければ四〇万壮士をおちつかせることはできない。しかるに大久保は「三千万人民のための福利を謀らなければならないので断固反対」しなければならぬ。両派の争いは進歩派が勝利し、西郷、江藤、板垣等は下野した。明らかにこの両派の背景は封建的要素とブルジョア的要素があり、事実上の封建勢力とブルジョア勢力の闘争である。

侵略的側面が強調されている。続いていう。

征韓を主張して容れられなかった西郷隆盛は弁学の名

で多くの不平分子を糾合し、一隅に拠って、隠然として明治政府の敵国になった。一八七七年（明治一〇）、熊本で一万五千の兵が反乱をおこし、政府は全国の兵力（警察も含める）を用い、莫大な犠牲をはらって（死者六千、負傷一万）やっと平定した（隆盛は自殺した）。この戦いで明治政府の「欧化」軍隊（多数は農民出身）ははじめて彼等の實力を發揮し、封建的武士に決定的打撃を与えた。西南戦争の結末、不平分子の騒乱は一段落を告げた。

李は明治維新はブルジョア革命でなく、絶対王制の成立とみており、西郷隆盛は封建反動で、不平武士の首領であったとし、明治維新革命の不徹底が日本帝国主義の特殊性を決定したという。

以上のような明治維新論と西郷隆盛論は当時の日本のマルクス主義の立場からする明治維新研究の影響を受けていたと思われる。

二

中国に於ける西郷隆盛論を検討するとき、截然とではないが、二つのアプローチがある。一つは前章で紹介したよ

うな、二十一か条要求以後の日本近代が中国侵略の途に突き進むのは何故かという問題意識で、実証的研究による歴史叙述である。それは大陸侵略主義者の原点、征韓論者の西郷隆盛としてとらえるという特徴がある。他の一つは中国の変革を、明治維新の延長線上にとらえ、西郷隆盛の行動に共感、共鳴を求めるものである。換言すれば、論者自身が中国の政治改革、革命を構想する時、学ぶべき人物として、過去形としての西郷隆盛でなく、現在形としての西郷像である。

後者のような中国の明治維新研究は、孫文が一九二四年一月二三日、長崎で日本の新聞記者にむけて「日本の明治維新は中国革命の第一歩です。中国革命は明治維新の第二歩です。中国革命と明治維新は実は同じ意義をもつものです⁽¹⁶⁾」という認識につながる。孫文は明治維新を不平等条約と国内統一を成し遂げた革命として考えている。したがって討幕過程から立憲制成立、条約改正なども包含して明治維新というのである。明治維新は中国の変革にとって一つの鑑であり、継承すべき伝統であった。それ故に維新の精神は両国の連帯の絆となり得るのである。

孫文はこれより先、「日本の旧文明は皆中国から輸入し

た。五〇年前、維新の諸豪傑は中国の大哲学者王陽明の知行合一の学説に心酔したが故に、みな独立尚武の精神を身につけ、四五〇〇万人の人民を水火の苦しみから救う大功を成し遂げた⁽¹⁷⁾」と述べている。これは一九〇五年七月、まさに清朝打倒の大同団結となる中国同盟会結成の時であった。ではこの時期、中国は日本からのどのような情報を得て、明治維新や西郷隆盛を認識していたのだろうか。その理由を探るために、当時、中国訳された日本の明治維新に関する文献、書物がどのようなものであったかをみるのも一つの方法であろう。「明治維新的再探討」付録の「我国明治維新史論著訳著資料要目索引 一八九六—一九八〇」に列挙されている書物と、それにくわえて国会図書館所蔵及び東京都立中央図書館の実藤文庫所蔵の中から、明治維新に関するものを挙げると以下のようである。

- | | |
|-------------------|-------|
| 北村紫山『日本維新三傑伝』 | 一九〇一年 |
| 長田偶得『日本維新英雄兒女奇遇記』 | 一九〇二年 |
| 西村三郎編『日本維新慷慨史』 | 一九〇二年 |
| 阪東宣雄『日本維新活歴史』 | 一九〇二年 |
| 東京博文館編輯『日本維新史』 | 一九〇二年 |
| 西郷隆盛伝(林志鈞訳) | 一九〇三年 |

白海渙長『日本政史』

一九〇三年

野村浩一『日本明治維新小史』

一九〇六年

煙山專太郎撰『征韓論実相』

一九〇六年

西郷南洲遺訓

一九〇八年

日日新聞社「明治政党小史」

一九〇二年

于河岸貫一編『日本維新百傑伝』

一九〇三年

岡本監輔『日本維新人物史』

一九〇三年

蕭鴻鈞編『明治維新小史』（清国留学会館）

一九〇六年

太陽雜誌編『明治維新四〇年政党史』

一九〇七年

以上のような書物が今日の明治維新史、明治史の研究にどのような意味をもつか明らかでない。ただ中国語に訳されたという点で、当時の中国人の関心がどのようなであったかを窺い知ることができる。

全体的には維新変革過程につき活動した討幕の志士の叙述が多い。中でも西郷隆盛が主役として叙述されているのが目立っている。例えば最初の北村の『日本維新三傑』は総頁の半分以上が西郷隆盛伝である。阪東の『日本維新活歴史』は内容は全くの西郷隆盛伝である。

最後の『明治維新小史』は編者の蕭鴻鈞は湖南出身である。本文一九六頁の小冊子であるが、その編纂の由来をみ

ると、大変興味深い。当時法政大学速成科講義録をもとにして、それに学んだ事柄と研究した成果をいれて、中国留学生のための定本を編集したのである。最初は法政大学に留学していた陳天華が手をつけたが、その後を蕭が引き継いだとおもわれる。それに雲南の張肇興、江蘇の焦汝霖が手伝い、脱稿、公刊した。陳天華と蕭鴻鈞はともに湖南である。

その第一章で幕末期の思想状況を述べて、とくに水戸学派に注目して、およそ次のようにいう。「朱舜水を学祖として、その後浅見俊斎、竹内式部、藤田東湖等をあげて、水戸修史の儀を継承し、尊王を天下に宣明した。西郷隆盛は平生水戸学を好んだ。水戸学は漢学の直接の結果であった。学問の普及が維新成立させた。道光咸豊の頃、湖南の魏源の海国圖志が日本に流入し、日本武士は外国事情に通じた。攘夷の志士が誕生する」と。前述した孫文の「日本の旧文明は中国から輸入した」ことを主張しているのである。

西南戦争については、「西南戦争は西郷隆盛の真意ではなかった。江藤新平が挙兵に敗れて、薩摩に庇護を求めたが、それを拒否した。熊本、山口などの争いに対しても毅然としていた。大丈夫は大いに為有り、人と心を一つにして成有り。苟も本を務めざれば瑣々枝葉党派の争いは必ず

乱となる。内患生れば外侮を禦す、南州死後、社会は団結し、全国風潮は沸き上がり、民智は日に開け、憲法公布のときその賊名は除かれ、復権した。いま上野の銅像は香花供養、朝野崇拜し、逝きし愛国者の魂を慰めている」と述べている。そして最後に勝海舟の辞を載せている⁽¹⁸⁾。

亡友南州氏 風雲定大是 弘衣故山去 胸襟淡如水
悠然事躬耕 嗚呼一高士 豈意素国紀 甘受叛賊訾
笑擲此残骸 以付教弟子 毀誉皆皮相 誰能察微旨
唯有精靈在 千載存知己

つまりこの中国留学生の定本ともいえる『明治維新小史』においては、西郷隆盛は一高士なのであった。

編者の蕭も、また最初にこの編纂を企圖した陳天華も湖南の出身であったが、さらに、黄興、蔡鍔、宋教仁等湖南派の出版物「游学訳編」には伝記読物として「日本第一人述」⁽¹⁹⁾(明治柱石伝及明治百傑伝)が四回にわたって連載されている。日本の第一人者西郷隆盛は中世以来の腐敗を一掃し、明治維新を創立したというのである。

また「湖南編訳社叙」で次のように言う⁽²⁰⁾。

四〇年前、尊皇討幕が成功し、国是が定まったのは卓越した指導者がいたからである。彼等は皆、吉田松

陰の門人である。その後、福沢、加藤、中村、中江等が続き、西洋文明を翻訳、紹介したので、三島(日本)に西欧思想が横溢した。一〇年もたたぬうちに、民智・民智が大いにのび、国勢が日にさかなくなり、立憲政体が成立し、六大列国の仲間入りをした。安南、ビルマが滅亡し、支那、朝鮮が弱化したのに、この小さな三島の四〇〇〇万人が何故そうならなかったのか。それは誰の力によるのか。答は吉田(松陰)、西郷(隆盛)、福沢(諭吉)の功によるのである。吉田、西郷、福沢等皆一介の書生、彼等は慷慨して事に任じ、激情風発して、維新の大業を成就したのであった。

湖南省は中国の薩摩と称していた。「湖南は尚武を好み、薩摩の風がある。日本建国は薩摩に依存したが、将来の支那も湖南に頼らんとするものである」。中国近代百年の政治史上、湖南省は特徴的で、常に政治の波頭に立っていた。この湖南省こそが中国の薩摩であると主張する。ちなみに現在鹿児島市と長沙市は姉妹都市である。

『游学訳編』に蔡鍔が書いたと思われる『致湖南士紳諸公書』が掲載されている⁽²¹⁾。それには以下のように述べている。今維新の大業の志士の名を数えあげると、三藩(長州、

薩摩、土佐の志士をあげないわけにはいかない。この藩の志士の中でも、薩摩の西郷隆盛南州翁を推さなければならぬ。湖南は中国の薩摩にならなければならぬ。日本は小さく、また薩摩は湖南にくらべて小さい。しかし日本は変わってしまった。中国は大邦であり、故に湖南は大薩摩である。だがまだ中国を変えることができない。湖南には屈原、王船山等の人物が輩出している。湖南が変われば中国はこれに続くと思ふ。それ故、同志は団結して立ち上がろう。

日本の陸軍士官学校で学んでいた蔡鍔は一九一五年の反袁世凱の第三革命の護国軍の領袖であるが、その政治行動の原点に西郷隆盛がイメージされていたのは興味深い。

政治行動の原点を、革命行動における自らの道德性の問題としてとりくんでいた湖南出身の宋教仁が、一九〇六年二月一四日の日記に「凡そ古昔の聖賢の学説、英雄豪傑の行事、皆当に取て之に法るべし。例えば王陽明の致知、劉戡山の慎独、程明道の主敬、以及び華盛頓^{ワシントン}の克己自治、拿破侖^{ナポレオン}の刻苦精励、瑪志尼^{マッツィーニ}の至誠、西郷隆盛の不欺、皆吾人の当に服膺すべき所の者なり」と記している⁽²²⁾。

この内容は改革者たる者は己を厳しく律しなければなら

ないと自戒しているのである。こうした真面目さは前年の二月八日、留学生取締規則に抗議して、「絶命書」を残して、大森海岸で入水、死を選んだ陳天華こたえるものであったという。というのは「絶命書」は朝日新聞の留学生の「放縦卑劣」という記事にたいして、留学生に自ら律すること、道德の向上を訴えたものであったからだ。宋も陳も湖南の人、宋は陳の死を聞いたとき陳の作った「猛回頭」⁽²³⁾うたって落涙したという。こうした状況からの西郷隆盛論であるから、そのイメージは極めて個人の内面的な道德的な西郷隆盛論であった。

以上の維新及び西郷隆盛論は実証を伴い、具体的事実を追及する歴史研究というのではなく、あくまで彼らが当面対決している清朝政治権力の変革を求める立場から、思想的なより処にすることになった。湖南省関係でいえば、冒頭の左宗棠も湖南であり、かつての論文で考察したので割愛したが、湖南出身の革命派の領袖で中国同盟会のナンバー2である黄興は中国の西郷隆盛と称せられたし、自らも西郷隆盛を尊敬していて、鹿児島で西郷隆盛の墓参をし、詩作もしている。この点については前掲の拙論を参考にされたい。

湖南省ではないが、陳独秀が一九〇三年八月、「上海国民日報」に「題西郷南洲遊獵圖」という詩を載せているのもその一つである。⁽²⁴⁾

勤王革命皆形跡 有逆吾心罔不鳴 直尺不遺身後恨
枉尋徒屈自由身 馳驅甘入棘荆地 顧盼莫非羊豕群
男子立身惟一劍 不知身敗与功成

中国同盟会、革命派系の西郷隆盛論を紹介したが、康有為、梁啓超、譚嗣同等の西郷隆盛論もある。これも前掲拙論で述べている。ただ「新民叢報」七号の口絵に日本維新の二人として、西郷隆盛と福沢諭吉が掲載されていることを付言しておく。⁽²⁵⁾

三

次に一九二〇年代に入り国民革命の進行と田中義一内閣の山東出兵という日中関係の厳しい現実から登場する西郷論について紹介したい。

一九二七年出版された戴季陶『日本論』は代表的な日本論である。⁽²⁶⁾ 薩長対立史観というべきバイアスはあるが外国人の日本論の傑作と言えよう。明治維新論と西郷隆盛論については「維新事業成功の主力はどこにあったか」とい

う一章をもうけて、「いったい誰が中心人物であろうか。誰が権力を掌握した領袖であろうか。藩兵の勢力では薩摩藩が最大であるから、薩摩藩士の領袖であった西郷隆盛が、群雄を糾合する地位を占めたのは当然だが、人物の点でも偉大な人物といえはまず西郷隆盛である。かれの部下が多士済々であったことは、あらためていうまでもない。ところろがたまたま征韓論をめぐる衝突で薩土肥三藩の勢力は根こそぎにされてしまった。一方、軍事、財政など国家中枢の権力を握り、後の軍閥、財閥勢力の基礎を築いたものこそ、腐臭紛々たる長州閥の貪官どもであった。何と不可解なことではなからうか。個人の仕事の失敗がかえって時代の成功の原動力となることも多いし、個人の仕事の成功がじつは失敗者の恩恵に浴していることも多い。たとえば、日本のここ数十年の歴史を通観してみると、西郷隆盛がいい例だ。かれは現実には失敗したが、その後かれの抽象的人格は、日本民族の最近五十年の絶対支配者となつて、多くの事業がかれの人格の力で推進されている。またかれに従って失敗した土肥両藩のエネルギーは、形を変えて、後の民権運動の中心となつたばかりでなく、その余光は今日に及び、日本の既成政党のすべてを支配している。

いっぽう、成功をおさめた長州藩は、今日、西郷の前にひざまずかざるをえないばかりか、民論の推移にしたがって、政策を決定せざるをえないのである。事実問題だけをとりあげても、西郷の征韓論はかれの死後十八年（すなわち一八九五年、日清戦争）にして実現し、死後三十年（一九一〇年韓国併合）にして公然と目的を達した。かりに明治四年の段階で西郷の征韓論が通っていたとしたら、一大災禍を招いて、日本の維新は御破算となり、西郷の人格も埋もれたままになったかもしれない」と叙述している。

この書の序文を書いた胡漢民は「この一節は百の西郷賛辞に匹敵する。たしかに西郷は王政統一の時代に謀反を起こし、反逆の大罪を負わされて死んだ。しかし死後数年にして、かれの銅像は上野公園に聳え立ち、全国人民の崇拜を集めることになった。しかも、日本全国どの銅像もこれに比肩しえないのである」といつている。ともあれこの書の目的の一つは西郷をもちあげて、田中義一を批判することにあった。

もう一人あげると、知日家として、若い時に「新民叢報」に論陣をはったこともあり、かつ軍人である蔣百里（方震）は「日本人―外国人的研究²⁷⁾」を書いている。そこでは「真

に日本精神の美德の代表とするに足る人物がいる。つまり西郷隆盛だ。しかし、彼は典型的に悲劇の主人公となった。というのは、彼は彼に反対した敵に敗北したのではなく、彼の愛した学生に敗れたからだ」と述べている。

以上の戴季陶、胡漢民、蔣百里三人の西郷隆盛論は日本の膨張主義政策に対する中国民族運動の激化、不平等条約撤廃という国民革命の進展を背景にしていた。

一九三六年家禾『西郷隆盛伝』²⁸⁾が公刊された。著者はこの頃、非常に多くの日本論を発表している。いずれも二・二六事件前後の日本政治、社会に関するものである。とりわけ軍部の政治への干渉が強化される事に警告と論評を加えるものである。こうした日本研究、日本論の集大成のケースとしてこの西郷隆盛伝が書かれたと思われる。序文でおおよそ次のように述べる。

ヨーロッパ資本主義の発展の結果、東アジアには異常な事態が生じた。すなわち日本は世界列強の一員となり、中国は半植民地になってしまった。中国の歴史研究者でこの事態を説明するものはいない。日本は明治維新の結果、封建制度中の商業資本が工業資本に転じた。西南戦争によって封建勢力は一掃された。日清

戦争、日露戦争を経過して日本資本主義は成長して、一九一四年の世界戦争の時、帝国主義に突入した。

九・一八事件は中国人を覚醒させた。多くの人が前進するためには、目前の日本について認識しなければならぬ。政党と財閥の関係、指導的軍人と財閥の関係など、政治経済的側面を中心として紹介がされているが、イデオロギーの方面はまだである。そこで武士道の考察をしなければならない。「武士道」という語は我々は昔から知っている。しかしこれに合理的解釈をした中国人はいない。日本人の自惚れからいう「武士道」はすなわち「忠君愛国」なりと称するものがあるが、全く歴史に暗いでたらめな説である。武士道は武士の道であって、武士は只禄米で自分を養っているだけのことで、何が「君」だか知らないし、「君」の上に「国」があるかを知らない。しかも歴史から言えば、武士道はまた多く「反逆」の道でもある。明智光秀が織田信長にそむいたことである。「敵は本能時に在り」は日本人の好む故事である。

日露戦争後、日本軍部は、西南戦争で失ってしまった「武士道」を再生させようとしている。武士道の模

範人物は日本史の中にもとより非常に多い。明治維新後は西郷隆盛であり、金融資本主義の今日、日本でこの説が流行している。それ故西郷隆盛の歴史を研究して、現在日本軍部の提唱する武士道と大西郷隆盛の精神とは本来に異なっていることを明らかにしなければならない。私はこの書物を読んで現在の日本軍部の領袖で西郷隆盛に及ぶものは一人もないことを多少は感じてくれると思います。今日の「皇軍」の軍人の生活状況及び立身の道も西郷隆盛らと全く違う。これは封建制末期と没落せんとする資本主義文明との差異といえよう。

西郷隆盛等は日本人で彼らの行為は民族的である。次第に悪化して行く現在の中国にとっても述べる価値がある。おおくの幕末の英雄豪傑、志士、奇人らは功名を捨て、富貴を捨て、敬愛している「西郷先生」に従って行った。これらの事実を本書は多く書き入れているが、現在の中華民国の国民に多少の刺激を与えると考える。

本書の目的の一つは何故西南戦争が起こったかを明らかにしたかった。そのため煩を厭わず詳細に述べた。

参考とした文献は伊藤癡遊、白柳秀湖の作品である。

最近大阪毎日に連載されている徳富蘇峰の「西郷南州

再検討」は非常に浅いものである。

以上のような視点で西郷隆盛について西南戦争を中心に叙述する。

西南戦争は三つの反政府運動の潮流が集約されていると言う。すなわち農民の地租改正に対する反対、徴兵制に対する旧武士層の反対、そして民権運動である、西郷隆盛はその個性と信望によって「反逆」の領袖、「朝敵」の罪魁として、つくりあげられたが、西郷隆盛の死は四〇万士族のための死であり、政府に反対する農民のための死であり、自由民権を戦う人のための死であった。しかし、西郷隆盛自身は自由民権には反対であったが、民権党と合作することは相互に思うところがあったからである。

この民権党の件については、宮崎八郎の協同隊がかなり詳細にふれられている。「宮崎八郎についていえば彼の一族は中国国民党領袖と相当な関係がある。孫中山の著作にはしばしば宮崎弥蔵、寅蔵の名が出てくる。彼ら二人は八郎の弟である」と紹介し、宮崎兄弟の中国革命に果たした役割の大きいことを述べている。宮崎兄弟については今日で

は上村希英雄氏の優れた大著があり、明らかにされているが、家禾の著作は宮崎八郎の西郷隆盛宛の協同隊挙兵の趣旨を載せ、これを宮崎が西郷隆盛より一段抜いている証拠としている。

明治六年以来、政府政を失し、奸吏位を竊み、賞罰は愛憎に出で、政令は姑息を究目、苟且偷安、外は国際の権利を失し、内は末世の兆候を呈す。是れ人民の痛憤切齒する所なり。此時に当り、政府は更に刺客を遣り、西郷隆盛陸軍大将を刺んとす。事由発覚、兇徒縛に就く。此に於て西郷大将朝廷に問ふことあり。則ち東上の専使を派す。我輩多年の宿志を遂ぐる此時に非ずして何ぞ。乃ち同心協力断然暴政府を覆し、内は千歳不拔の国体を確立し、外は万国対峙の権利を恢復し、全国人民と共に真成の幸福を保たんと欲す。是我輩の素志なり、我輩の義務なり。

西郷隆盛殿

協同隊

この一文の書き上げる時のいきさつ、内容の読み取りについては、上村希英雄氏の力作を参考にしたい。⁽²⁹⁾ともあれ三〇年代の中国でここまで西郷隆盛の生涯に迫っていたこ

とは注目に値する。

そしてこの西郷隆盛傳の終わりには勝海舟の招魂祠をあげて結びとしている。著者は一九三四年大岡山に滞在していて、この碑がある洗足池畔を訪ねているのである。

百代興衰不足論 攘夷倒幕有奇功 桜花醒眼無旬日

肝胆照人有此君 煙火城中餘舊影 斜陽池畔覓殘址

世間多少傷心事 桃李春深暗乞魂

むすび

中国に於ける西郷隆盛研究は歴史学としての叙述であるとともに、いやそれ以上に中国の变革を志向する主体勢力の鑑としての、フィクションであったといえる。その波頭にたったのが「唯楚有才」と自負する湖南派であり、実際辛亥革命の有力な推進母体を形成した。そして明治維新が過去の事実として、終わってしまったものというより、現在形として日本に蘇生するのを期待していたのである。中国革命は第二の明治維新だというのは、その意味でもあった。

最後に一九三六年のことを紹介してして結びとしたい。魯迅が同年一〇月一九日亡くなる直前に増井経夫氏に西郷

隆盛関係の資料の収集を頼んだという。増井氏は約束を果さなかったと書いておられる。また蒋介石が西郷隆盛の關係書を集めたという。そしてこの年の二月一二日、世界を驚かせ、中国政治の転機となったといわれる西安事件が起こったが、この立役者の一人楊虎城は蒋介石を釈放して二日後、二つの故事を挙げて、この事件を説明している。「左伝」にある楚王の話と、もう一つは西郷隆盛の例をあげ、「西郷隆盛は封建体制を倒し、明治天皇の新政府樹立に貢献した。しかし天皇は憲法を發布しようとしなかった。そこで、西郷隆盛は兵を起こして明治天皇に反対した。そこで明治天皇は憲法を約束した。西郷隆盛は挙兵を取りやめて、罪をわびたが、天皇は憲法を發布するとともに、西郷隆盛を殺害した。この時、二四〇人が割腹自殺した³⁰」と語った。つまり二つの故事は自己を犠牲にして、国家を救ったと言うのであった。ここで故事の事実の詳細を楊虎城に問うことは無意味である。

中国の西郷隆盛論は、戴季陶『日本論』の主張するように、日本軍国主義は、西郷没後、真の武士道・尚武を失なった結果であると、厳しく批判する政治論であるばかりか、西安事件にみられる中国自身の变革をを求める政治論にも

なっていたと言えよう。

注

- (1) 司馬遼太郎・陳舜臣『対談中国を考える』（文春文庫 一九八三・九三、九七頁）
- (2) 原書房 一九七九年 四七頁。ここでは西郷隆盛がロシアの情報を得るため派遣した密偵の池上四郎中佐、武市熊吉少佐が北京で左宗棠に会いロシアの膨張政策の情報を収集し、帰国後、西郷隆盛にその旨報告したと述べられている。
- (3) 田村貞雄「西郷論の系譜」（歴史公論 一九七七年一月号、雄山閣）
- (4) 毛利敏彦『明治六年政変の研究』（有斐閣 一九八七年）、『明治六年政変』（中央公論 一九七九年）
- (5) 「東京学芸大学紀要」 三部門 社会科学 三九集 一九八七年、なお西郷隆盛論として河原宏『西郷伝説』を参考のこと
- (6) 世界歴史特集号「明治維新的再探討」（新華書店 一九八一年）
- (7) 北京出版社 一九八七年、同書は小島晋治監訳『アヘン戦争から辛亥革命：日本人の中国観と中国人の日本観』（東方書店 一九九一年）として翻訳
- (8) 『東アジアのなかの日本歴史』六（六興出版 一九八八年）
- (9) 山口一郎『近代中国対日観の研究』（アジア経済研究所 一九七〇年）
- (10) 小島晋治『アジアからみた近代日本』（亜紀書房 一九七八年）。変法派、革命派の明治維新論を中心にし、さらに日本近代を批判する劉師培「亜州現勢論」もとりあげられている。王氏は清末を通じて、魏源、李鴻章、黄遵憲、康有為等の維新論、日本観を考察している。中国で明治維新論、日本論の増えるのは、日清戦争後である。とりわけ日本に留学生が増えるにつれて活発になる。その実例を実藤恵秀氏、黄福慶氏の研究書によって知ることが出来る。
- (11) 中国日本史研究会『日本史論文集』（新華書店 一九八二年）所収
- (12) 米慶余『日本西南戦争』（商務印書館 一九八六年）五七、六〇頁
- (13) 井上清『西郷隆盛 上下』（中央公論新書 一九七六年）、後藤靖『土族反乱の研究』（一九六七年）
- (14) 戴季陶、張継、何天炯の連名である。中国科学院歴史研究所『五・四愛国運動資料』（一九六七年 大安影印）
- (15) 山口前掲書
- (16) 中央党史編纂委員会『国父全集 第四集』（一九五七年）五三一頁
- (17) 同前 第三集 一頁「中国応建設共和国」

- (18) この詩は松浦玲氏の『明治の海舟とアジア』（岩波書店一九八七年）によると、一八八四年（明治一七）に作られ、「亡友帖」として、知人に配布されたが、中国人の引用は「只道自居正」の一句が落ちているという。（五三、五七頁）
- (19) 訳者不明、国会図書館編『明治期刊行図書目録』には「明治柱石伝」は掲載されていない。もう一つの「明治百傑伝」は同じ書名で于河岸貫一著（明治三五年三月）と山口孤剣著（明治四四年一月）の二種類がある。両方とも内容は「遊学訳編」と異なっている。
- (20) 『湖北学生界』第一期（一九〇三年一月）
- (21) 中華民国史料叢編『游学訳編』第三期（一九〇二年二月）毛注青等編『蔡鐸集』（湖南人民出版社一九八三年）に採録されている「致湖南士紳」と同文である。
- (22) 松本英紀『宋教仁の日記』（同朋出版一九八九年）
- (23) 竹内弘行『中国の儒教的近代化論』（研文出版一九九五）二六八、二七一頁
- (24) 有田和夫「陳独秀の思想的出発 康党から乱党」（東洋大学中国哲学文学科紀要 四八集 中国哲学文学科 一九九五）年
- (25) 「新民叢報」第七号（光緒二八年四月）
- (26) 戴天仇著市川宏訳『日本論』（社会思想社 一九八三年）
- (27) 蔣方震『日本人：一個外国人的研究』（『日中問題重要関

係資料集第一巻』所収）

- (28) 北京大学図書館所蔵。著者の家系は鄭学稼と思われる。鄭は一九三六年当時、申報週刊に毎号のように日本論を掲載し論陣を張っていた。例えば「日本政変後之陸軍」（一卷一五期）、「馬場財政政策与中国」（一卷一六期）、「広田内閣与軍部」（一卷一八期）等々である。
- (29) 上村希英雄『宮崎兄弟伝 日本編上』（葦書房 一九八四年）二〇八、二二二頁 「協同隊拳兵の主意はまさにこの一文に尽きているとも見られるのではないか。西南戦争とは、彼らの側からすれば、理不尽な政府の一方的挑発によって惹き起こされた戦争であり、この『天人共に容れざる』暴政府を倒すことこそ、とりも直さず人民の権利であり、むしろ『我輩の義務』なのであった」と。
- (30) 李云峰『西安事変史実』（陝西人民出版社 一九八一年）三四五、三四六頁

追記

横山宏章氏から「西郷隆盛と陳独秀——詩文からみた幕末と清末の志士」（明治学院論叢 第五八九号、法学研究 第六二号 一九九七年三月）を頂戴した。しかしすでに初稿済であるため、この旨のみ記載しておく。

（本学国際政治経済学部教授）